2.6. キリマンジャロ五八九五㍍登頂記（補足、二〇〇二年一月）———

二〇〇二年一月早々、アフリカの屋根キリマンジャロ五八九五㍍に登頂した時の感動は前項に記した。その稿で述べたようにキリマンジャロ登山全体の行程は三つから成っていた。高地順応のための訓練登山(12/27-30)、本番の Kili 登山(12/31-1/5)、下山後のサファリ公園他(1/6-8)である。ここではその稿で簡単に済ませた最初と最後の部分について少々詳しく記録を残しておきたい。

- 高地順応のための訓練登山（メルー登山、12/27-30）

二〇〇一年五月、オーストリア山岳会の下打合わせに顔を出した。計画は年末年始の二週間。技術的な難度は案ずるほどの山ではないようだ。が、決心を鈍らせる要因が一つあった。「数日間はテント泊り、シャワーなし」である。耐えられるか、と思った。「案ずるな」と言うガイドの言葉に説得力はなかった。「毎日シャワーを浴びるのは体に悪い」とすら言うオーストリアンがいる世間だ。一九九六年、週末旅行で同室になったハイキングクラブの仲間だった。そんな訳でためらいもあったが結局山行の魅力に勝てず、参加することを決意した。

- 十二月二十六日(水)

前日までに荷造りは済んでいた。ポーターに預ける袋鞄に 12～13kg 入れるとリュックは殆ど空荷。「本当にこれで良いのか」と不安な位である。山岳会のガイド指定品に加えて、即席味噌汁、梅干し、乾し納豆、カイロを荷に入れた。初日は早い飛行機で三時起き。寝坊の心配はなかったが、念のため日本からの目覚ましコールを予約した。実際には緊張か興奮か夜半の零時過ぎには起き出してしまった。体力作りに少々の不安はあったが、多分大丈夫だろう。昨日今日、寒さへの準備の気持ちもあって寒波のウィーンで少々の薄着をして、「風邪かな」と思える症状を呈したが楽観したい。体調を気遣ってくれる人がいることを嬉しく思う。四時、ガイドのヴェルナーが車で拾ってくれて空港へ。初めて参加者全員と会う。総勢十四名、うち女性四名。予想通り全員オーストリア人。私だけが例外。独りだけの顔見知りは親切そうな老人。ドイツ語の良い学習機会と楽観する。

アムステルダム経由キリマンジャロ空港へ夜九時過ぎ到着までは特別のことはない。窓から見える一角にモンブランもあるようだが特定できない。次の夏には登るんだ、との気持ちでヨーロッパアルプスを見下ろす。空港は二十度を越えている。さすが南国だ。寒かったウィーンとは様変わりである。ジーパンが鬱陶しい。ホテルへ車で一時間。湯の出ない水シャワーのあと就寝。部屋には蚊帳がある。

- 十二月二十七日(木)

起きてテラスに出るとキリマンジャロが見える。頂きに雪が一部。標高差 5000 ㍍もあるようには見えない。あの頂上で実行したいパフォーマンスをイメージして眺める。ここまでの機内で考えてきた。「人生最高点」に立つのだからケルンを建てて、日の丸と写真を撮って...。

十時、車に荷を乗せて出発。現地ガイド、ポーター、料理人二十六人が同乗する[1]。車は出発点の国立公園ゲートまで走る。二時間。昼過ぎに着いて「いよいよ出発」と思ったら、昼食の準備が始まった。同行のコックは若い女性である。紅茶を入れ、パンを配り、野菜を切ってサラダにし[2]、チキンの空焼きを配って...。これから登る Meru の山容が眼前に広がる。傍らでポーター用の荷の重量を測っている。ポー

[1] 彼らのありがたさに感謝することになる。重い荷を運ぶだけでなく行き先ざきで食事を準備し、テントを設営してくれる。「先憂後楽」の言葉を思い出した。
[2] 最初は手を出すのを躊躇した。先が長いからとあきらめて生野菜も口にした。結果的には無害だった。

ターがつくのはキリマンジャロ本番だけかと思っていたため、今回は全部の荷をリュックに入れていた。それなら、とそのリュックをポーターに預けることにする。私の荷は１３kg位である。各ポーターは３０kgの位荷を持って三々五々と出て行く。昼食後、私は水筒と軽食だけを持って歩き出す。隊の先頭はレンジャー。銃を手にしている。野生動物への防備と聞く。

途中で雨に遭うが雨具はリュックと一緒にポーターの背にある。ガイドの予備雨具に助けられて五時過ぎ Miriakamba 小屋（標高 2750m）に到着。夕食も美味しい。全行程を通して予想より美味しかった。嬉しい誤算だった。キリマンジャロ銘のビール３＄。東の空に夕陽に映えるキリマンジャロが聳える。すそ野の広がり、その下に点在する湖、富士に似ている。山中湖や下部温泉を思い出す。中天に満月が輝く。日本も年末だなあ、この月を見ている人もいるかなあ。九時過ぎ就寝。

－　十二月二十八日(木)

外の風音に何度か目覚める。小用、大用に立ったあと五時過ぎ起き出す。晴天。山はこうでなくっちゃ、と。七時過ぎ出発。前日は空身で失敗したので今日は寝袋他をヴェルナーの袋に託してリュックは自分で持つ。森林限界 3100㍍。が、人の背程度の潅木はまだ上へ続いている。昼前に今日の宿、Sattel 小屋（標高 3400m）に着く。まさに夏山だ。この高さで蝿やあぶが飛んでいる。

昼食後、小屋の脇から小 Meru（標高 3800m）へ向かう。次第に高度が上がり、富士山に匹敵する高さで「日本の最高点に近い」と嬉しくなる。思わぬことが起きた。小屋に戻って頭痛である。「風邪か」と思った。行き会った単独行のアメリカ人と話していて寒気を感じて慌てた。大事な本番を前に大変、と大急ぎで着込んだ。実は高山病だと知るのは一両日後である。この高度で高山病は予想しなかった。それなりの準備はあったにしても 4600㍍のモンテローザですら高山病の実感はなかった。高山病にしろ、風邪にしろこれからのキリマンジャロ本番への不安が高まった。この夜はビールも控えて早めに鳩小屋のベットに潜り込む。幸い眠れる。

－　十二月二十九日(土)

未明四時に出発。空は暗いが月も星も明るい。今日も快晴のようだ。今日は Meru（標高 4566m）への高度対策登山である。高度は今までの最高点、昨年夏の Monte Rosa に近い。この Meru も遠景では富士山に似た独立峰で美しい。一晩寝ても頭痛が消えない。風邪か高山病かの不安を持ったまま、山肌を巻くように大きくトラバースしながら高度を上げる。息切れを感ずる。しばらくしてそれが落ち着くと鼻血。驚くがこれも直ぐ止まる。あとは順調に「ザラ峠」を登る。

七時過ぎ、4000㍍を超す。この頭痛が高山病だとするとなぜだろう、と考える。南国で高度は同じでも空気が薄いのか、モンテローザは岩場での緊張が高山病を感じさせなかったのか。陽が出ると急に暑くなる。汗ばむ。

九時前、トップ集団として頂上到着。キリマンジャロ主峰が見える、左手にはケニアにつながる平原が広がる、後方には登ってきた長い道が続く。いわゆる「難しい道」ではない。「単調」に近い。

下山はいつもの様に早い。昨夜の Sattel 小屋で昼食を済ませて Miriakamba 小屋まで降る。頭痛は依然消えない、とすると風邪かと不安は続く。「風邪なら下に残れ」とヴェルナーに言われるのが心配で言い出せなかった。が、不安が勝って相談すると「案ずるな、皆頭痛だ、高山病だ」と一笑に付した。「そうなのか、皆平気そうだけど」と安心。スパゲッティの夕食で少し元気を戻す。

- 十二月三十日(日)

六時過ぎ目覚める。頭痛は「殆ど」消えている。ホッ！とする。やはり高山病だったのか。下山直前に象、キリンに遭う。大きい。アフリカを実感する[3]。ポーターと別れて午後、四日振りにホテルに戻って休息。シャワーで身を清めてからのテラスでキリマンジャロを見ながらの独りパーティ。驚くな、そのメニュー。

ビール。肴は昼食残りのゆで卵。ウィーンから持ってきた残り物のレタスに味噌をつけて。日本からの乾し納豆。次いでは食堂で熱湯を貰ってきてなんと焼酎の梅割り。食欲増進用に持ってきた梅干し、今朝はレモンと和えて携行飲料にしたがその残りが役立った。旨い。日本の味だねえ。レタスはなくなったが味噌を楊枝で掬って...。

日本は間もなく大晦日、正月準備は済んだか。今年は定年も迎えた、そして明日から「人生最高点」に向かう。来年もいい年であって欲しい。いつまで高い山に憧れるのか、と問われても答えはない。が、この Kili の高さは最後だろう、二度と 5000㍍を越えることはあるまい。還暦の思い出と企画した一連のプランは来年七月の Mont Blanc で区切り、と思っている。日本へカード書く。

- 十二月三十一日(月)から一月五日(土)のキリマンジャロ登頂本番は別項に譲る。さて、下山後...

- 一月六日(日)：Manyara 湖キャンプ地へ移動。

今日から二日間、エクストラのレジャー予定。キャンプ地へ昼ごろ移動、テント設営後、自然公園へ象

[3] 蛇足ながら、二十センチ大の干からびた象の糞にもお目にかかった。

やキリンを訪ねる。前日までの Kili 登頂で感動の力を使い切ったのか、自然公園を廻ってもあまり気分が盛り上がらない。キャンプ地から自然公園への道端に見る民家や人の様も珍しい筈なのに眼は半ば空ろである。

食中りなしに今日まで来た。そろそろウィーンが恋しくなったかと感ずる。感動することは疲れることだ。日立工場大運動会の主将、韓国でのシンポジウム、Grossglockner 登頂。この Kili 頂上の感動も忘れないだろう。

- 一月七日(月)：サファリ公園へと出発そして事故。

車は走る。凸凹の山道を走る。キャンプ地を出て半時間余り、異様な雰囲気に包まれる。道路脇の村人が前方に向けて駆けている。その数が刻々増える。間もなく前方からこちらに向かう村人の姿が視野に入って来る。「何事か」と思う間もなく、道端左側に転げ落ちた車が一台。村人が素手で屋根や扉をこじ開けている。なんと先行していたわれわれ仲間の車だ。顔見知りの Kurt が人込みの中を歩いている。彼は大丈夫らしい。こじ開けた屋根から血まみれの怪我人を村人が取り出そうとしている。頭から血を流している。

われわれの車からヴェルナーが飛び出す。怪我人を車に収容して最寄りの病院へ一目散。同乗する。が、凸凹道の振動に怪我人はうめき速度は出ない。応急処理に祈る。重傷二人、中傷二人、軽症一人。運転手も中傷。頭蓋骨が変形しているかと思えるほどの重傷の一人に顔が歪む。医師への状況説明に英語で協力。ヴェルナーは保険、ヘリ手配、大使館との連絡、と大車輪の仕事。しかし、その地方病院には充分な器具があるのかどうか。収容された部屋にエアコンも看護婦コール用ボタンもない。

結局事故から八時間後、重中傷の四人と運転手は近くのポートから軽飛行機で最寄りの町の大き目の病院に移送、翌日更に重傷の二人はケニアのナイロビに転送。精密検査となるべく早期のウィーン移送を待つことになった。ナイロビからはオーストリアに直行便があるという。最善を祈った。中傷の二人と軽症の一人は夕刻ホテルに戻る。翌日の予定便でわれわれと同時に帰国することになった。当然ながら予定のサファリ公園は中止。

- 一月八日(火)：帰路へ。

飛行機は夕刻なので半日の自由時間だが全員ずっとホテルで待機。重傷の二人に付き添ったヴェルナーから朝方電話連絡。ナイロビにしばらく残る二人の荷物を届けたり、ホテルとの精算等で居残り組みが協力している。私は記録の整理に時を過ごす。書いているとまた頂上での感動を思い出す。

夕刻空港へ移動。ヴェルナーの荷物を預かって帰ることになった。ヴェルナーは現地に残った[4]。

[4] 重傷の二人も数日以内に帰国できた。今後の精密検査、治療での完全な回復を祈って止まない。